In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	低程度評価を表す「だけだ」と「にすぎない」
Author	藪崎 淳子
Citation	文学史研究. 61 巻, p.13-25.
Issue Date	2021-03-30
ISSN	0389-9772
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学国語国文学研究室
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

（『文学史研究』61号　2021．3）

低程度評価を表す「だけだ」と「にすぎない」

藪崎淳子

1．はじめに

本稿で扱うのは、次のような用法である。

（1）祝言といってもざっとしたものであった。二人が並んで坐り、貰ったばかりの箱膳を三方の代りに、三三九度の盃を交わした［だけである／ニスギナイ］。（さぶ）

（2）シャドーボクシングをする内藤の動きには冴えがなかった。上半身は軽やかに動いているように見えるが、足の運びにスピードがない。ただ、すり足で前に進んでいる［にすぎない／ダケダ］。（一瞬の夏）

（1）では、祝言が三方もなしに、〝三三九度の盃を交わす〟程度であったことを表している。（2）は、シャドーボクシングの足の動きが〝すり足で前に進む〟程度であることを表している。動詞に接続する「だけ」に「だ」が続く場合（以下、「ダケダ」）と、動詞に接続する「にすぎない」という複合的な形（以下、「ニスギナイ」）は、（1）（2）のように相互置換可能な場合がある。そのため、2節で見るように辞典類では両者を同義とするような記述が見られる。しかし、（3）（4）に見られるように、両者は全く同じ意味を表しているわけではない。

（3）「冗談じゃない。ご承知のように、当社はいま、非常に苦しい立場にある。少し待ってもらえないだろうか。決して返済しないつもりではない。待っていただきたい［だけだ／??ニスギナイ］。無理に取り立てられたら、つぶれてしまう……」（人民は弱し官吏は強し）

（4）陽はまだ東の松並木の先にあった。七時を少し廻った［にすぎない／??ダケダ］。街道を右へ曲ったところで吟子はふと利根へ行ってみようかと思った。（花埋み）

そこで、両形式の相似・相違について考える。

2．辞典類の記述

『教師と学習者のための日本語文型辞典』は次の例をあげ、

（5）それが本当にあるかどうかは知りません。例として言っているに過ぎないんです。（147頁の（3））

これは「「例として言っているだけだ」の意味」（147頁、下線は本稿筆者による。以下、同）であると説明するものの、両者の差異には触れていない。『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』では、ニスギナイは「述語となっている節を取り立てる場合には「だけだ」と置き換えることができ」る（342頁）との記述に加え、「「にすぎない」を用いると限定の意味に加えて、「質的・量的に低いレベルだ」という話し手の評価的な気持ちを表」すとの説明がある（341頁）。[注1]これは、ダケダとニスギナイは「限定」を表す点で共通するものの、「低いレベル」であるという話し手の評価を表すのは、ニスギナイのみであるという説明にとれる。しかし、「低いレベル」であるという評価をニスギナイのみが表すのであれば、（1）（2）においてダケダとニスギナイを用いる場合で意味に差が生じるはずだが、いずれでも低い評価を表していると感じられる。

以上のように、ダケダとニスギナイについて、両者が類義関係にあることは記述されているものの、なぜ（3）（4）のように相互置換できない場合があるのか、両者の差異については考察の余地がある。

3．ダケダの用法

ダケダとニスギナイの差異を考察する上で参考になるものに、ダケダの用法を三種に分類した安部（一九九九）、森山（二〇〇二）があげられる。両氏の議論について、本稿の理解を整理したのが次の表である。[注2]

【表1】安部（一九九九）、森山（二〇〇二）のダケダの分類

安部（一九九九）	森山（二〇〇二）	用例
典型的なダケダ文	排他用法	（6）実体験を書いただけだ。 （7）今朝はりんごを食べただけだ。
慣用句用法	事態選択的用法	（8）収入が減ったら節約するだけだ。 （9）こうなったら法的手段をとるだけだ。
直前状態用法	排他用法と事態選択的用法の中間	（10）あとはお肉を焼くだけだ。 （11）あとはデザートのりんごを食べるだけだ。

安部（一九九九）の「慣用句用法」、及び森山（二〇〇二）の「事態選択的用法」は、「当該事象が発話者にとって「前提を満たす唯一の選択肢」として選択されている」（安部一九九九：45）ことを表す（以下、これを「事態選択的用法」と呼ぶ）。これは、（8）の「収入が減ったら」、（9）の「こうなったら」のように、前提となる条件が文中や文脈にあらわれ、その条件のもとに選択する事柄を取り上げている。安部（一九九九）の「直前状態用法」、及び森山（二〇〇二）の「排他用法と事態選択的用法の中間」は、「ある事柄について、それが完了するために残された事象である」（安部一九九九：45）ことを表す（以下、これを「排他用法と事態選択的用法の中間」と呼ぶ）。当該用法は、（10）（11）のように「あとは」が共起するなどし、ダケが示す事象以外は既に整っていることを表す。そして、ここまで見た二つの用法に見られる特徴を有さ

ないのが、安部（一九九九）の「典型的なダケダ文」、及び森山（二〇〇二）の「排他用法」である（以下、これを「排他用法」と呼ぶ）。

両氏が提示するダケダの三分類はニスギナイとの差異を考える上で有効である。それは、「事態選択的用法」「事態選択的用法と排他用法の中間」の二種は、ニスギナイに置換し難いからである。

（6）実体験を書いた［だけだ／ニスギナイ］。
（7）今朝はりんごを食べた［だけだ／ニスギナイ］。
（8）収入が減ったら節約する［だけだ／??ニスギナイ］。
（9）こうなったら法的手段をとる［だけだ／??ニスギナイ］。
（10）あとはお肉を焼く［だけだ／??ニスギナイ］。
（11）あとはデザートのりんごを食べる［だけだ／??ニスギナイ］。

「排他用法」の（6）（7）は、ニスギナイに置き換えても自然であるのに対し、「事態選択的用法」の（8）（9）、「事態選択的用法と排他用法の中間」の（10）（11）は、ニスギナイに置き換え難い。従って、ニスギナイと意味的に近いのは「排他用法」のダケダであることが分かる。(注3)

このように、安部（一九九九）、森山（二〇〇二）によるダケダの分類は、ニスギナイとの差異を考える上で有用である。ただし、ダケダの基本的な意味の捉え方については、両氏と本稿で異なる。安部（一九九九）、森山（二〇〇二）は、「典型的なダケダ文」、及び「排他用法」については「不足感」（安部一九九九）、あるいは「微小的評価のニュアンス」（森山二〇〇二）を表すのに対し、他の二種はそうした意味を表さない点で異なるとしている。しかし本稿は、ダケダは用法を問わず限定する事柄に対し〝当然なことでたいしたことはない〟〝容易なことでたいしたことはない〟という話し手の評価を表す点で通底していると考える（藪崎二〇一二）。

（6’a）実体験を書いただけだ。たいしたことではない。
（6’b）??実体験を書いただけだ。大変なことだ。
（8’a）収入が減ったら節約するだけだ。たいしたことではない。
（8’b）??収入が減ったら節約するだけだ。大変なことだ。
（10’a）あとはお肉を焼くだけだ。たいしたことはない。
（10’b）??あとはお肉を焼くだけだ。大変だ。

aに見るように、限定される事柄に対して程度が低いという評価を伴う場合の方が、bの程度が高いという評価を伴う場合に比べて自然である。従って、ダケダは用法を問わず、限定する事柄に対して程度が低いことを表す「当然・容易」という評価を表すと考える。

4．問題の所在

3節で見たように、ニスギナイと類義関係にあるのはダケダの「排他用法」である。ただし、「排他用法」のダケダとニスギナイが全く同じ意味を表しているわけではない。(注4)

（12）（ボクサーが体重について）「でもね、明日とあさっては何もトレーニングをしないで食べる［だけでしょ／??ニスギナイデショ］。だから、今日、かなり落としておかなければならないんだ」（一瞬の夏）

先にあげた（3）と（12）は、「排他用法」のダケダである。にもかかわらず、ニスギナイに置換し難い。また、ダケダに置き換えにくい

ニスギナイの例も（4）の他、次のようにある。

（13）予科一年の成績は、華語、歴史の八十四点を筆頭に、総点七百四十八点で、席次は八十四人中二十四番である。欠席は四百六十四時間中、十四時間を数える［にすぎない／??ダケダ］。予科二年の成績は総点数六百九十三点で、席次は七十七人中三十五番に落ちた。（金閣寺）

従って、「排他用法」のダケダとニスギナイの差についてさらに考察が必要である。加えて、他の二種のダケダはなぜニスギナイに置き換えにくいのか、という問いも残されている。

5．ダケダとニスギナイの差異

結論を先取りする形になるが、両形式は次のように異なっていると考える。

【表2】ダケダとニスギナイの差異

意味＼形式	ダケダ	ニスギナイ
限定	+	−
程度を表す客観的スケールの形成	−	+

ダケダは限定を表すのに対し、ニスギナイは限定を表すものではない。一方、ニスギナイは程度を表す客観的スケールを形成し、そのスケール上の低い程度に留まるという評価を表すのに対し、ダケダはそうしたスケールを形成しない。ダケダは話し手が「当然・容易」だと評価する項目に限定されることを表す。

5・1．限定

ダケダが「限定」を表すことは、言うまでもなかろう。（1）では、「祝言」において行ったのは、〝箱膳を用いて三三九度の盃を交わす〟ことに尽き、〝数日にわたる宴を催す〟ことや〝謡の披露〟、〝晴れの日にふさわしい道具や料理をそろえる〟ことなどは行わなかったことを表す。ダケダを構成するダケの意味からも、これが「限定」を表すことは納得されよう。

一方、ニスギナイが「限定」を表さないと見るのは、次のような例からである。

（14）「仲良くしたほうがいい。手を握ったならば、明日にでも幕府は倒れる」

だれでもわかることを言った［だけ］にすぎないのですが、竜馬には言いだしっぺの魅力というものがありました。（『週刊朝日』二〇二〇年六月五日）

（15）（「桃太郎」を題材にした児童模擬裁判について）弁護側は「村人を救うためという目的は正当だし、木刀で脅した［だけ］にすぎない。緊急的に必要な行為だった」と主張。（『朝日新聞』二〇一七年八月十六日）

（14）（15）では、ニスギナイにダケが前接している。（14）では、「だれでもわかることを言った」のであり、〝意外なことを言う〟ことや、〝難しいことを言う〟ことはしていないという意味を表している。（15）は、「木刀で脅した」ことに尽き、〝けがをさせる〟などの他の

被害を与えていないことを表している。いずれも「ダケ＋ニスギナイ」が指し示す事柄のみが実現したという「限定」を表している。仮に、この「限定」の意味をニスギナイが本義として表すとすると、なぜ「限定」を表すダケを承接するのか、説明がつかない。[注5] 従って、ニスギナイは「限定」を表すものではないと本稿は考える。このことは、動詞接続以外のニスギナイからも裏付けられる。

（16）この時、内藤はまだ二十一歳にすぎなかった。（一瞬の夏）

（17）貴賓室の片隅にはこれも独逸製のピアノが飾ってあった。飾ってあるというのは、誰もこれを弾く者がなかったからである。（中略）今ではこのピアノはその上にセーブルの磁器などを飾るための台であるにすぎなかった。（楡家の人びと）

（16）は〝まだ二十一歳である〟ことを表すもので、何かを排除する意味合いはない。（17）は「ピアノ」が「磁器などを飾るための台」に成り下がっていることを表しており、ピアノの役割が「飾るための台である」ことに限定されるという意味は表していない。もちろん、（16）（17）のように動詞に接続しないニスギナイは、そもそもダケダに置き換えられず、意味に差がある。しかしながら、前接する項目の品詞によって、ニスギナイ自体が異なるとは考えられず、その意味は通底していると考えられる。従って、ニスギナイは「限定」を表すものではないと考える。

5・2．程度を表す客観的スケール

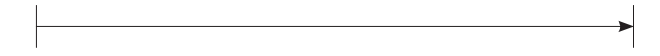
ニスギナイが形成する「程度を表す客観的スケール」について説明する前に、スケールに関する本稿の考えを述べておきたい。[注6]

（18）学校まで歩いた。

（19）10番まで部屋に入った。

（20）妻にまで裏切られた。

【図1】（18）学校まで歩いた。



【図2】（19）10番まで部屋に入った。

1番 … 2番 … 3番 … 4番 … 5番 … 6番 … 7番 … 8番 … 9番 … 10番

【図3】（20）妻にまで裏切られた。

（裏切る可能性高い）知り合い … 友人 … 親友 … 親戚 … 妻（裏切る可能性低い）

（18）からは、図1のように始発点から「学校」に至る連続的なスケールが描かれる。これは場所名詞「学校」とマデの結びつきが、「歩いた」という移動動詞と結びついていることから自ずと想起されるスケールである。図1は本稿が描いたものではあるが、（18）からは誰しもが同様のスケールを描くことができよう。（19）からは、図2のような「10番」に至る非連続的なスケールが描かれる。これは「10番」とマデの結びつきが、「入った」という動詞と結びついていることから想起されるスケールである――図2のスケールは、「10番まで」が数字であることによって形成されるところが大きいものの、例えば、「（背番号）10番までもらった」など、結びつく動詞によっては〝実力が評価されることに加え、チームのエースとしても認められた〟という解釈になることもあり、述語との結びつきもスケール形成に関わる――。（19）のスケールは、「1番、2番……」と非連続的な要素が序列づけられて形成される点では、（18）の連続的なスケールとは異なる。しかし、（19）は、ここから誰しも同様のスケールを描けるという点では、（18）と同じである。（20）は「妻にまで」という名詞句と「裏切られた」という述語との結びつきによって、他に〝裏切った〟に該当する人物がいることを想起させる、範列関係を表している。そして、〝裏切る〟可能性の高い人物から低い人物へと序列づけた、図3のような非連続的なスケールが描ける。このスケールは、非連続的な要素による点では（19）と同じである。しかし、（20）のスケールは話し手の主観によるのに対し、（19）のそれは客観的なものである点で質的に異なる。(注7)

このようにスケールには、（18）（19）のように客観的なものと、（20）のように主観的なものと二種ある。このうち、ニスギナイによって形成されるのは、（18）（19）のような客観的スケールであり、そのスケール上の程度の低い点を示すことで、当該事態が低い程度に留まることを表すと考える。

（4）陽はまだ東の松並木の先にあった。七時を少し廻った｜にすぎない／??ダケダ｜。街道を右へ曲ったところで吟子はふと利根へ行ってみようかと思った。（花埋み）

（13）予科一年の成績は、華語、歴史の八十四点を筆頭に、総点七百四十八点で、席次は八十四人中二十四番である。欠席は四百六十四時間中、十四時間を数える｜にすぎない／??ダケダ｜。予科二年の成績は総点数六百九十三点で、席次は七十七人中三十五番に落ちた。（金閣寺）

（4）は外出が許容される範囲内に留まることを表している。それは、女性の外出という点で、容易に許容される時間帯からそうでない時間帯へという、一般常識による客観的スケールが形成され、そのうち夜間外出としては程度が低い、〝まだ陽が出ている「七時を少し廻った」〟点をニスギナイが示しているためである。（13）は欠席時間がさほど問題とはならない程度であることを表している。それは、欠席の累積時間数という客観的スケールを形成し、「四百六十四時間」という全体に対し、さほど累積量が多くない「十四時間」をニスギナイが示しているからである。このように、客観的スケールを形成するのは、動詞接続のニスギナイに限られることではない。

（16）この時、内藤はまだ二十一歳にすぎなかった。（一瞬の夏）

（17）貴賓室の片隅にはこれも独逸製のピアノが飾ってあった。飾っ

てあるというのは、誰もこれを弾く者がなかったからである。

（中略）今ではこのピアノはその上にセーブルの磁器などを飾るための台であるにすぎなかった。（楡家の人びと）

（16）からは年齢というスケール、（17）からはピアノのはたらきの程度というスケールが想起される。そして、（16）ではボクシング選手として今後の活躍が期待される若い年齢に留まることを、（17）ではピアノのはたらきのうち、活用されているのは低い程度に留まることを表している。このように、動詞接続以外のニスギナイにおいても、客観的スケールが形成されており、これがニスギナイに通底する性質であると捉えられる。

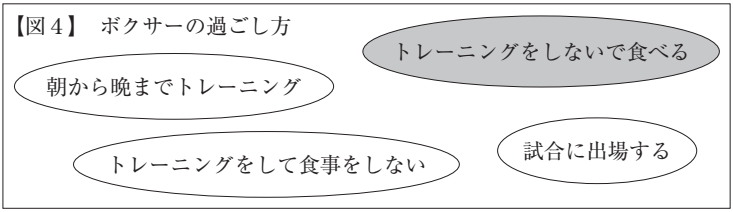
一方、ダケダはスケールが客観的か否かということを超え、そもそもスケールを形成するものではない。

（12）（ボクサーが体重について）「でもね、明日とあさっては何もトレーニングをしないで食べる［だけでしょ／??ニスギナイデショ］。だから、今日、かなり落としておかなければならないんだ」（一瞬の夏）

（21）ニュースは横目で見る［だけだ／?ニスギナイ］。テレビのニュースというやつは、どうも部分と全体のバランスがとれてないように思う。（風に吹かれて）

（12）を図式化したのが図4である。（12）からはボクサーの過ごし方という意味で同類の〝朝から晩までトレーニングをする〟〝トレーニングはするが減量のために食事をしない〟〝試合に出場する〟などといった項目が想起される。ただ、これらのうち、どの項目の程度が高く、また低いかということは決まっておらず項目間の序列はない。こうした項目のうち、ダケダで示す「トレーニングをしないで食べる」に限定されることを表しており、スケールは形成されていない。（21）は、ダケダによって、ニュースへの対し方という意味で同類の〝ニュースを見ない〟〝毎日欠かさず熱心に見る〟〝ぼんやりと眺める〟といった項目が想起される。しかし、「横目で見る」ことと、〝ぼんやり眺める〟こと、あるいは「横目で見る」ことと、〝ニュースを見ない〟こととの間で、どちらの方がニュースへの対し方として程度が高い、あるいは低いといった序列はない。ダケダを構成するダケにはそもそも範列関係にある項目を序列づけてスケールを形成するはたらきはない。このダケの性質からも、ダケダがスケールを形成しないことは納得されよう。また、（12）（21）のダケダはニスギナイに置き換えると許容度が下がる。従って、これらの例からは、ニスギナイの使用にはスケールの存在が不可欠であることも裏付けられる。

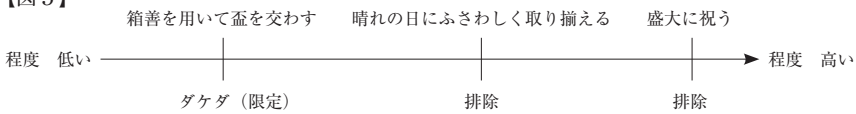
【図4】 ボクサーの過ごし方



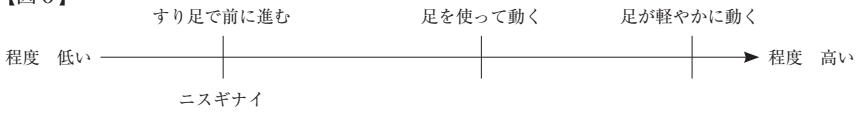
6．なぜ置換可能なのか

5節で見たように、ダケダは話し手が「当然・容易」であると評価

【図5】



【図6】



する項目に対する限定を表し、スケールを形成するものではないのに対し、ニスギナイは客観的なスケールを形成し、そのスケール上の低い程度に留まるという評価を表す。では、なぜこのように差異のある両形式が置換可能になる場合があるのだろうか。

（1）でダケダが示す〝三方の代わりに箱善を用いて三三九度の盃を交わす〟ことは、祝言としてはごく簡素なものであると評価される。またこの評価は、話し手だけでなく一般にも共有されよう。そのため、読み手はダケダが示す項目をスケールの端とし、図5のような「祝言」としての程度の低いものから、程度の高いものへと序列づけたスケールを描くことができる。その結果、読み手は序列の中で最も程度が低い段階に留まったことを表しているととれることから、ニスギナイに置き換えられるのである。

（2）シャドーボクシングをする内藤の動きには冴えがなかった。上半身は軽やかに動いているように見えるが、足の運びにスピードがない。ただ、すり足で前に進んでいる」にすぎない／ダケダ」。（一瞬の夏）

（2）では、シャドーボクシングの動きの程度の高低による客観的なスケール上の、低い程度を表す「すり足で前に進む」をニスギナイで示し、動きが低い程度に留まっていることを表している。このスケールは図6のような非連続的な項目によるスケールとして描くことができる。ニスギナイの表す低い程度で留まるという意味は、裏を返せばそれ以上のことはしていないということである。非連続的な事柄によって形成されているスケール上で、「すり足で前に進む」という程度にしか到達していないということは、他の項目を排除する限定と同義にとれる。そのため、ダケダに置き換えられるのである。

話し手の評価は主観的なものであり、それは世間一般や聞き手の常識と一致するとは限らない。しかし、両者は常に食い違うわけではない。時間などの数値は客観的でしかないが、話し手の考えが聞き手の常識と一致している場合、それは客観的なものにも見える。また、低い程度に留まり、それ以上ではないという意味は、高い程度の項目を排除しているようにもとれる。ダケダとニスギナイは、指し示す項目が非連続的な事柄を表し、その事柄の程度が低いという評価が広く一般にも共有されるものである場合に近接するのだと説明される。

7．語用論的な差異

ダケダとニスギナイの意味上の差異は、両形式の運用にもあらわれる。

ダケダは、話し手が「当然・容易」という評価をすることに限定されることを表す。その評価は話し手の主観によるものであり、世間一般や聞き手と一致する必要はない。そのため、他の意を顧みず、個人的な主張をする場面にも用いられる。

（3）A：「安楽君も死んでしまったし、保険会社が手形で金を貸しておくのは、原則としてみとめられない。このままだと、やっかいなことになる。すぐに清算してもらいたいと思い、こうして出かけてきたわけだ」

B：「冗談じゃない。ご承知のように、当社はいま、非常に苦しい立場にある。少し待ってもらえないだろうか。決して返済しないつもりではない。待っていただきたい［だけだ／??ニスギナイ］。無理に取り立てられたら、つぶれてしまう……」（人民は弱し官吏は強し、A・Bは本稿筆者による）

（22）「そりゃ私から見れば分っています。（先生はそう思っていないかも知れませんが）先生は私を離れれば不幸になる［だけです／??ニスギマセン］。或は生きていられないかも知れませんよ。そういうと、己惚になるようですが、私は今先生を人間として出来るだけ幸福にしているんだと信じていますわ。（後略）」（こころ）

（3）は借金の返済に関するやりとりである。貸し手のAは返済時期の延長について「みとめられない」とし、〝返済を待つ〟ことは困難であると述べている。にもかかわらず、Bは「返済しない」という難しいことではなく、〝返済を待つ〟という容易なことを頼んでいるのだと主張している。（22）の〝私を離れると先生が不幸になる〟ということは、発話者である「私」にとっては当然の帰結であるという評価を表している。(注12) しかし、この評価があくまで「私」によるもので、他者に共有されていないことは、「私から見れば」「先生はそう思っていないかも知れません」というところにあらわれている。（3）や（22）のように、他の意を顧みず、話し手の個人的な主張ができるのは、ダケダがニスギナイのような客観的なスケールを形成するものではないことを裏づける。こうした性質は、3節で見た「排他用法」以外のダケダにも通底している。

（23）（聴覚障害偽装による障害年金の詐取事件について逮捕された社会保険労務士へのインタビュー）

―受給者に年金をだまし取らせる意思はあったか。

「だまし取らせるつもりはなかった。（中略）受給希望者から診断書を預かれば、社会保険庁に提出する［だけだ／??ニスギナイ］」（朝日新聞二〇〇九年六月一二日）

（24）逃げたりしちゃいかんよ。だいたい、逃げてもむだ。貴様が逃げればまたフン先生を牢屋にたたきこむ［だけだ／??ニスギナイ］からな。（ブンとフン）

（25）あとは安田の筆跡がどうして名簿に載ったかということを追及する［だけである／??ニスギナイ］。（点と線）

（26）試合の場所はソウルの文化体育館、あとは日時をテレビ局と

決める「だけだ／??ニスギナイ」。たぶん七月二十五日の前後になるだろう。（一瞬の夏）

(23)(24) はある条件において、選択することを示す「事態選択的用法」である。選択とはまさに話し手の意志によるもので、他者と共有するものではない。(25)(26) は「あとは」が共起し、当該の事態完了のために残されたことを表している。このダケダが示す事柄のみが残されているとの判断は話し手によるものである。森山（二〇〇二）がこれらを指して「排他用法と事態選択的用法の中間」としているように、当該用法は (23)(24) のような話し手個人による選択を表す用法に近く、話し手の主観的評価が色濃い。(23)～(26) のダケダ二種の用法にニスギナイがなじまないのは、話し手個人の主観的な評価であることが明確で、客観的スケールを形成する性質と相容れないためであると説明される。

一方、ニスギナイには次のような例が多く見られる。

(27) 鈴木裁判官は逮捕監禁を「卑劣で悪質」としながら、守田被告は秋山被告に脅されて指示に従い、永松さんがすでにロープなどで拘束されていた状態を維持した「にすぎない／ダケダ」と指摘した。（朝日新聞二〇一八年八月二日）

(28) 被告側はこの日までに、原告側が申し出た意見陳述を許可しないよう求める上申書を提出。この日の弁論では「東京高裁判決について自らの都合のよいところを恣意的に誤って引用している「にすぎない／ダケダ」」などと反論した。（朝日新聞二〇一七年十二月二十四日）

(27)(28) は、いずれも裁判における発話である。このニスギナイはダケダに置き換えても文法的には何ら問題はない。しかし、ニスギナイは、証拠などに基づく客観的な意見であるという印象を与えるのに対し、ダケダを用いると、個人の主観的な主張のような印象を与える。これらにニスギナイが用いられるのは、客観的なスケールを形成する性質により、表す低程度評価が客観的な指標に基づくというニュアンスになるため、客観的・論理的判断が求められる裁判という場との親和性が高いからであると考えられる。

8. おわりに

「取り立て」を表す形式は助詞に限らず、副詞や複合的な形式もあり、これらを覆う「取り立て」の体系をどう描くべきかという課題がある（工藤二〇〇〇、丹羽二〇〇七、藪崎二〇一七、二〇一八、茂木二〇一九）。それには「取り立て」を表す諸形式の意味記述はもちろんのこと、「取り立て」の外延を定める必要もある。ダケダは排除する項目を想起させ、限定する項目とそうでない項目との関係を表す「取り立て」である。一方、ニスギナイは項目間の関係を表すものではなく、程度を表すスケールを形成し、低い程度に留まることを表すものである。動詞接続の場合には、事柄がスケールを形成することが多く、非連続的な項目が並ぶことから、範列関係を表しているかに見える。しかし、ニスギナイは動詞接続の場合でも、時間などの連続的なスケールの形成も可能である（例4、13）ことに鑑みると、範列関係を表すものではない。従って、ニスギナイは典型的な「取り立て」ではない。[注11] 両形式の記述からは、「取り立て」体系構築の課題も浮き

彫りになる。

注

（注1）類似の記述は他にも見られる。ニスギナイについて、森田・松木（一九八九：286）には「〝その程度・範囲を出ない〟というのが原義で、〝それ以上のものではない〟〝ただそれだけのものだ〟〝特に問題にすることはない〟などの意味を強調するのに用いる」とある。また、『新装版　どんなときどう使う日本語表現文型辞典』には「それ以上のものではない・ただその程度のものだ」と言って、程度の低さを強調するときの表現」（304頁）とある。

（注2）安部（一九九九）と森山（二〇〇二）の議論が表1のように対応するという理解は、あくまで本稿によるものである。森山（二〇〇二）は、「排他用法」のダケダに前接する動詞はル形とタ形、他の二用法はル形のみと、統語的特徴にも着目した分類をしているが、安部（一九九九）には前接形式の統語的特徴についての言及はない。しかし、あげられている例文や記述の内容から、両氏の議論は表1のような関係にあると読める。

（注3）『新潮文庫の100冊』には、条件を表す従属節が共起するニスギナイが二例、「あとは」が共起するニスギナイが一例見られた。

①私は彼に、もし我等二人だけが男同志で永久に話を交換しているならば、二人はただ直線的に先へ延びて行くに過ぎないだろうと云いました。（こころ）

②東洋には自然科学を育てて行く雰囲気は無いのだと宣告した。果してそうなら、帝国大学も、伝染病研究所も、永遠に欧羅巴の学術の結論だけを取り続ぐ場所たるに過ぎない筈である。（妄想）

③あとはただ、病んだ血の亡霊として、私につきまとっていたにすぎない。（初夜）

しかし、①②は主節の動作を選択するという意味合いはない。また、③も全て整い、当該の事柄のみが残されていることを表すものではなく、ここで取り上げている二種のダケダとは異なる。

（注4）「排他用法」のダケダがニスギナイと類義関係にあることは、森山（二〇〇二：155）にもある。しかし、当該用法のダケダが全てニスギナイに置換可能な意味を表すわけではないことについては、触れられていない。

（注5）限定を表す形式を承接させた例は、「現代書き言葉均衡コーパス」に「のみだけ」が四例見られるに留まり、それらはいずれも会議録やブログなど、口語的表現に限られる。また、『新潮文庫の100冊』に同様の例は見られない。

（注6）本稿のスケールに関する考えは、丹羽（二〇〇一）の「近傍・類似関係」と「同類・範列関係」に負うものである。

（注7）（20）のタイプは、範列関係にある各項目と、それらに対する評価が、文中・文脈に明示されない限り、助詞が示す項目がスケールの端に位置すること以外は明確ではない。そのため、（20）の話し手が図3と同じスケールを描いていたのか、それとも「友人……親戚……兄弟……親……妻」といった別のスケールを描いていたのかは読み手には分からない。それも、スケールが話し手

の主観的評価によって形成されるが故である。

（注8）（21）について、本稿はニュースをどう見るのかについて述べていると解釈し、スケールが想起できないと考える。ただし、情報収集の手段としてニュースを評価する、という読みであれば、〝積極的に活用するもの〟から〝まともに取り合わないもの〟というスケールを描くことができる。「ニュースは横目で見る（もの）にすぎない」という評価の程度を表すスケールを想起する読みであれば、ニスギナイの許容度はあがる。

（注9）サエやマデは、範列関係にある項目を序列付け、スケールを形成する性質を有する。「（20）妻にまで裏切られた」であれば、〝知り合い、友人、親戚〟といった言外の項目が想起されるだけでなく、〝裏切る〟可能性の高低による図3のようなスケールを形成する。一方、「妻にだけ裏切られた」は、〝知り合い、友人、親戚〟といった項目が想起される点は同じものの、これらの項目間に序列はない。藪崎（二〇一二）は、範列関係にある項目が序列付けられているか否かという点で、ダケダとマデダが異なることを論じている。

（注10）（22）は「私を離れれば」という条件節が共起している。しかし、主節が話し手の選択を表すものではないことから、「事態選択的用法」ではなく「排他用法」である。

（注11）「取り立て」の捉え方は立場によって差がある。本稿の考える「取り立て」については、藪崎（二〇一七）に述べた。

参考文献

安部朋世（一九九九）「ダケの位置と限定のあり方―名詞句とダケ文とダケダ文―」『日本語科学』6

庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘（著）、白川博之（監修）（二〇〇一）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク

工藤浩（二〇〇〇）「副詞と文の陳述的なタイプ」『日本語の文法3モダリティ』岩波書店

グループ・ジャマシイ（編著）（一九九八）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

友松悦子・宮本淳・和栗雅子（二〇一四）『新装版　どんなときどう使う日本語表現文型辞典』アルク

丹羽哲也（二〇〇一）「「取り立て」の範囲」『國文學　解釈と教材の研究』46－2

丹羽哲也（二〇〇七）「範列関係を表す複合副助詞」『人文研究』58

茂木俊伸（二〇一九）「とりたて表現の研究動向」『日本語と世界の言語のとりたて表現』くろしお出版

森田良行・松木正恵（一九八九）『日本語表現文型―用例中心複合辞の意味と用法』アルク

森山卓郎（二〇〇二）「取り立て助詞の文末用法をめぐって―「だけだ」を中心に―」『国語論究第10集現代日本語の文法研究』明治書院

藪崎淳子（二〇一二）「「ダケだ」と「マデだ」」『日本語文法』12－1

藪崎淳子（二〇一七）「「取り立て」再考」『日本語教育』166
藪崎淳子（二〇一八）「〈対立〉と〈並立〉―「取り立て」の体系構築をめざして―」『形式語研究の現在』和泉書院

（やぶざき　じゅんこ・追手門学院大学国際教養学部准教授）